

## ドミニコ会における「貧しい人々の優先」

宮 武 信 枝

### はじめに

ドミニコ修道会（正式名「説教者兄弟会」）は、2016年と前後数か月を含め、ドミニコ会創立 800 周年の聖年を祝った。カトリック教会全体の「いつくしみの特別聖年」とも重なった記念の年の説教者兄弟会総会は、7月 16 日から 8 月 5 日まで創立者聖ドミニコ・デ・グスマン（1170 年スペイン・カレルエガ～1221 年イタリア・ボローニャ）の眠るボローニャで開催された。教皇フランシスコは、総会参加者が終了前に謁見に訪れたのを受け、創立のカリスマを刷新するとともに、会の未来を確かなものとする 3 つの柱は、説教・証し・愛のわざであることを説き、とりわけ愛のわざについて語る際には、青年ドミニコのパレンシアでのエピソードを挙げた。

聖ドミニコは、生涯のはじめに一つのジレンマを経ましたが、それは彼の実存全体に刻印されました——「キリストの体が苦しんでいるとき、どうしてわたしが死んだ皮で勉強できようか」。それは生きて苦しんでいるキリストの体であり、説教者に向かって叫びを上げるなら、黙って放っておくことはできません。貧しい人々、見捨てられた人々の叫びは、イエスが人々に抱いていた共苦を呼び起こし、理解させます<sup>1)</sup>。

ここで言及されたのが、スペインでの飢饉におけるドミニコの行動である。彼は、貧しい人々の悲鳴を聞き、福音に従って少しもためらわず、死に瀕している貧しい人々を救おうと決意した。自分の財産、すべての所持品や本を売り払って、毎日食料品を分配する常設センターをつくり、貧しい人々に配っていった。貴重な写本が売却されるのを見て驚き嘆く友人に向かって、ドミニコは、「わたしは、多くの人が飢え死にしているとき、死んだ皮を使って研究することはできない」と答えた<sup>2)</sup>。この出来事は、ドミニコが貧しい人々の人間的、人格的尊厳を重んじ、貧しい人にかかわる使命について具体的、実践的に開かれた転機である。加えて教皇の指摘のように、ドミニコが貧しい人を苦しむキリストの体と同一視し、貧しい人を神の呼びかけと捉え、霊的尊厳をも見て取ったことと言えよう。

それから 300 年後、セビリャに生まれたバルトロメ・デ・ラス・カサス (1484 年～1566 年) は、司祭・植民事業家のエンコメンデロとしてキューバで農地とインディオ (先住民) 奴隷の分配を受けていたが、生き方の転換を迫られる出来事に出会う。1514 年、エンコミエンダを放棄し全く正反対の道に回心、生涯を先住民の擁護、暴力的植民政策の非難へと集中していく。この「第 1 回目の回心」の後、さらにドミニコ会に入る (「第 2 回目の回心」)。2 回の転機を経て死に至るまで、司祭、ドミニコ会士、司教、政治家、歴史家として、スペイン本国と新世界の植民地との間を結ぶ旅行、説教、議論、記録、報告、執筆、告発などあらゆる活動をもって、先住民の人間性と自由を尊重するという目的に生涯を捧げたのである<sup>3)</sup>。

これらドミニコ会の歴史の中で展開され、現代のカトリック教会における福音宣教にも要請されている「貧しい人々の優先」の霊性と実践について、特に、宣教者自身の回心と福音化、癒しという観点から考察する。

## I 「貧しい人々の優先」——霊性と教会の動向

### 1 「貧しい人々の優先」の霊性

「貧しい人々の優先」という翻訳用語、「貧しい人」、「優先」と訳されている言葉には、異論も疑問の余地もあるかもしれない。最初に、「貧しさ」、「貧しい人」という対象を考察する一助として、聖書の語る「小さい人」とモーセの「謙遜」について言及しておく。

言うまでもなく、彼は、エジプトからイスラエルの民を導いて脱出させた指導者であり、いわば英雄的存在とも見られる。聖書は、モーセのことを「この地上のだれにもまさって謙遜であった」(民数記 12・3) と語る。新共同訳聖書で「謙遜」と訳されている言葉は、いわゆる「へりくだる」といった徳性よりも、もともと「小さく貧しい」、肉体的、精神的、社会的に無力、悲惨、屈辱、試練、圧迫などに苦しむという聖書的な概念である。ドミニコ会士宮本久雄は、原語のヘブライ語を残して「彼 (モーセ) は最もアーナーヴな人であった」と訳した後、モーセの生き方を考察している。それによれば、モーセは、自分の民に石殺しにされる窮地にも追い込まれ、神と民の板ばさみになり、苦悩と孤独の責務から解放されるように懇願したこともあり、約束の地に入ることさえできず、人生の成功者とも宗教的成功者とも考え難い<sup>4)</sup>。イスラエルの民は小さく貧しい人々であるゆえに神に選ばれ、その中でいわば社会的上位、指導的立場に置かれたモーセも、やはり小さく貧しい人、「受難の人」であった。

旧約聖書の「アーナーヴ」が「謙遜」と訳されたことから日本での通例や概念に伴う難しさもあるが、「アーナーヴな人」の流れにあるキリスト教的な「貧しい人」、「小さい人」というとき、先入観を超えて考えねばならない。人間みなに「貧しい人」となる側面、場面がありうる。社会的立

場や肩書ではなく、一人の人間としての同じ立場で互いに向き合う場合がありうる。上下や一方的ではない、いわゆる「お互いさま」の意識である。「貧しい人」はただ受けるだけの人ではないということになる。もちろん第一義的に、「貧しい人々の優先、選択」というとき、より客観的、外面的に明確に表れ、物質的・経済的により貧困、困窮している人を対象として支援すべきことには間違いない。具体的には、時代や社会の状況によって適用の幅は変化するであろう。

## 2 「貧しい人々の優先」をめぐる現代カトリック教会の動向

### (1) 教皇フランシスコによる教説

現代の教会において、「貧しい人々の優先」という課題は、現教皇フランシスコがとりわけ強調する重要な福音的責務の一つである。教皇フランシスコは、2013年3月13日に第266代ローマ教皇として選出されたアルゼンチン出身のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿、初の南米出身、初のイエズス会出身、初の「(アシジの) フランシスコ」を名乗った教皇である。ラテン・アメリカ特にアルゼンチンの国情、社会問題に深く関わるイエズス会の伝統の影響もあろうが、彼が強調する社会正義、貧しい人々との連帯は、現代カトリック教会の中で「社会教説」として発展してきた流れを際立って促進させるものである。イエズス会司祭の小山英之は、歴史のコンテキストの中で「貧しい人々への優先的選択」に対する教会の理解がどのように進化してきたかを丹念にたどっている<sup>5)</sup>。ここでは、小山の著作以降にあたる現教皇の教会公文書における「貧しい人々の優先」を扱う。

教皇は、「信仰年」(2012年10月11日～2013年11月24日)を閉年する日に発表した使徒的勧告『福音の喜び』で、現代社会における福音宣教に関する幅広い課題を扱っている。第4章「福音宣教の社会的次元」の第2節が「貧しい人々の社会的包摂(ソーシャル・インクルージョン)」に割かれ、その中に「神の民における貧しい人々の特権的地位」と題された5つの項が含まれている<sup>6)</sup>。

まず、貧しい人々の優先の根拠を示す。何よりも「神ご自身が『貧しくなられた』(二コリント8・9)から」であるとし、神が人間イエスとなり貧しい人々と同じ者になったことを福音書から叙述する。救いが「辺鄙な小村に住む身分の低い少女から発せられた『はい』によってもたらされ」、救い主が「もっとも貧しい子どもたちと同じように生まれ」、イエスが「平凡な労働者の家で育ち、生活の糧を得るために自ら働き」、貧しい人々が彼に従ったことを述べる。それゆえ、貧しい人々は神のあがないへの「道しるべ」であるという(197項)。

次に、貧しい人々の優先について解説がなされる。貧しい人は、自らの苦しみ、痛みを通してキリストの苦しみを体験的に知っており、「わたしたちは皆、彼らから福音化されなければなりません」と明言する。キリスト者は、貧しい人々のうちにキリストを見出し、彼らの代弁者、友となり、傾聴、理解し、「彼らを通して神が伝えようと望んでおられる不思議な知恵を受け取るよう招かれている」(198項)。だから、貧しい人々に「仕えさせていただく」のであり、「彼ら特有の善良さ、

暮らしのあり方、その文化、その信仰生活をもって彼らの真価を認める」よう求める。「貧しい人々のための優先的な選択」によって、貧しい人々がわが家のような居場所とを感じるキリスト者共同体が、福音の最良のあかしになることを言う（199項）。

さらに、カトリック信者への呼びかけが続く。貧しい人々を優先する選択に宗教的配慮を含めるよう促し（200項）、最後に、「貧しい人と社会正義に対し心を砕くことを免れているであろう人は、だれ一人いません」、「霊的な回心、神と隣人への強い愛、正義と平和に対する熱意、貧しい人と貧困についての福音的な意味づけは、すべての人に要求されています」と訴えて締めくくる（201項）。

これら『福音の喜び』の勧めは、おそらく通常宣教者が考えてきたのとは逆、いわば価値観の逆転であろう。宣教する、福音化するという以上に、福音化される側にもいるという自覚と謙虚さを呼び覚まされる。

教皇フランシスコは、2015年5月24日聖霊降臨の主日には、環境に関する回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に』を発表した。その中でも、貧しい人、弱い人、傷つきやすい人をいわば「環境弱者」と見て優先し、「信仰者としてのもっとも深い確信に照らして、貧しい人々のはかりしれない尊厳の真価を他の何にも先んじて認めるよう要求します<sup>7)</sup>」と訴えている。これも、貧しい人の尊厳と真価を認めることが、福音宣教する以前に必要なだと主張するものである。

2016年11月20日、「いつくしみの特別聖年」閉幕に当たっては、使徒的書簡『あわれみあるかたと、あわれな女』を発表<sup>8)</sup>、その中で、神のいつくしみを思いやりのわざや貧しい人の支援といった信者個人の行動によって継続していくよう勧めた。とりわけ、カトリック教会の典礼暦で「王であるキリスト」の祭日を前にした「年間第33主日」に「貧しい人々の日」を制定し記念することを明らかにし、小さく貧しい人々へのイエスの愛を思い起こし、それに倣うことで、信者たちが「王であるキリスト」の祭日をふさわしく迎えることができるようにと願った。

これに伴い、2017年6月13日には、「口先だけでなく、行いをもって愛し合おう」をテーマとする第1回「貧しい人々のための世界祈願日」のための教皇メッセージを公表した<sup>9)</sup>。この貧しい人には、物質的貧困ばかりでなく霊的な貧困に苦しむ人も含めている。今日の社会で貧困を明確に定義することは難しいとしながらも、「苦しみ、疎外、抑圧、暴力、拷問、監禁、戦争、自由と尊厳の剥奪、無関心、無学と非識字、衛生面での緊急事態、雇用不足、人身売買、奴隷制、亡命、貧困、強制移住によってゆがんだ無数の人々」を列挙し、「薄汚い利益のために搾取され、権力と金銭を基盤にした屈折した論理に踏みつけにされた女性や男性、子どもたちの顔」を想起している。他方では、貧しさはキリスト者にとって「貧しいイエスに従う」ことでもあり、自分の限界と過ちを認めることができる謙虚さ、お金や成功にとらわれない幸いを知ることができる意味もあるとする。教皇は、「貧しい人々のための世界祈願日」の制定によって、イエスの貧しい人々への特別な愛という福音的要素を加え、この日、具体的に貧しい人々と一緒にミサに与るなどの多くの交流行事、身近にいる貧しい人々に積極的に寄り添い、受け入れる機会にするよう提案する。また、基礎となる

ものは常に祈りであり、特に「主の祈り」を「貧しい人々の祈り」として観想しながら唱えるように勧めている。教皇フランシスコは、「貧しい人は悩みの種ではなく、福音の本質を受け入れ、生きるためにくみ上げる泉なのです」とアピールした。この「貧しい人のための世界祈願日」制定に際しても、宣教あるいは支援する者が、それを通して福音化されるという視点が顕著である。

## (2) 教皇フランシスコによる実践

教皇フランシスコが、自らのメッセージをどう実現させたかに目を向けよう。

「いつくしみの特別聖年」閉幕を控えた最後の公式行事には、ホームレスや貧困者など社会で弱い立場に置かれた人たちとそのボランティアの人々を迎え、2016年11月11日から13日まで「社会的に疎外された人々の聖年」を行った。聖年の公式行事としての順序は最後だが、むしろクライマックス、頂点といえる。

教皇は、11日の謁見において、ホームレス代表者たちの経験や思いを傾聴し、また集まったホームレスの人や社会の隅に追いやられた人々にゆるしを願った——「私が自分の言葉によって皆さんを傷つけてしまったことがあれば、または言うべきだったことを言ってこなかったことについて、私は皆さんにゆるしを願います」。さらに、福音が全ての人に伴うとしているはずの尊厳を尊重してこなかったことについても、「私たちキリスト信者は何度も、貧しい人の前に立ちながら、または貧困の状況を目の当たりにしながら、目を背けてしまいました」とゆるしを願った。そして、福音のメッセージについて、連帯について、貧しい人のための貧しい教会をつくり上げることについて、教会が貧しい人から学ぶことができることも語りかけた<sup>10)</sup>。13日のミサでは、疎外され、見捨てられた人々を見ない振りをするのは神に背を向けることであり、「皆の家に正義がない時、自分の家の中だけで平和を享受することはできない」と話した<sup>11)</sup>。

教皇フランシスコは、2017年11月19日の第1回「貧しい人のための世界祈願日」にあたり、「口先だけでなく、行いをもって愛し合おう」のテーマをいかに実行し得るか、その具体例を示した<sup>12)</sup>。バチカンの聖ペトロ大聖堂で捧げたミサには、移住者や難民も含め、貧しい人々や支援を必要とする人々ら約4,000人と世界中から集まったボランティアが参加し、朗読などの祭壇奉仕もした。ミサの中で教皇は、「貧しい人のうちに、イエスは私たちの心の扉をたたいています」と語っている。奉納の際にはミサ後の昼食会で出されるパンが祝福され、参加者のうち約1,500人がパウロ6世ホールでの教皇主催の昼食会に招待され、その他の参加者たちもローマ市内の多くの神学院、カリタスの食堂等に招かれた。ほかにイタリアの各教区でもカリタス等が運営する食堂、宿泊所、小教区主催でも昼食会等が行われ、貧しい人々の優先が目に見えるかたちとして示された。

## 3 「貧しい人々の優先」の神学

これらの流れにも垣間見られる教皇フランシスコの神学的背景について、ホアン・アイダルはア

ルゼンチンの神学者ホアン・カルロス・スカノネの言葉を引用し、「解放の神学の流れを受ける民衆の神学に明らかな影響を受けている」と述べる<sup>13)</sup>。アイダルも、『福音的に』彼らを助けるために第一にしなければならないことは、助けようとする人々を尊敬し、彼ら自身から学ぶことと強調し、「貧しい人々の優先」または「貧しい人々のための選択」について、以下のように明確化している。

解放の神学者たちが共有する第二の理念は、…「貧しい人々のために優先的な選択をする」ということです。…富む人々より貧しい人々をより大切にしなければならない、という意味ではありません。疑いなく、イエスは貧者のためにも富者のためにも、つまり、すべての人のために来ましたし、すべての人と分け隔てなく接しました。貧しい人々のための選択とは、教皇フランシスコによれば「貧しい人々の観点から人生や生活を眺める」ことであると思います。別の言い方をすれば、貧しい人々を助けるために何かしたいというのでは不十分で、自ら貧しい者として考え、貧しい者として人生や生活を眺める必要があります。…単に、「貧しい人々のための」教会というだけでなく、教会自身が貧しくあれ、ということです<sup>14)</sup>。

すなわち、解放の神学からくる「貧しい人々の優先」という訳は理解しにくいものの、「貧しい人々の観点、立場を選択すること」、貧しい人々と同じ立ち位置を取ることになる。中南米から発展した解放の神学と教皇フランシスコの近さについてはこれまでも語られてきたが、アイダルは、「民衆の神学」で重要な第二の言葉「民衆」は、使徒的勧告『福音の喜び』の中でも164回現れ、教皇の神学で中心的な位置を占め、「貧しい者」という語の代わりに用いる言葉であると指摘する<sup>15)</sup>。

教皇が敬意を払い、神学者たちにとってのインスピレーションの源泉と考えられる「民衆」とは、まさしく単純素朴な人々で、…おそらく神の美や善を神学的に表現することはできないでしょうけれど、たぶん多くの神学者たちよりもよく神を知っています。したがって、民衆に近づく神学者は、学生が先生に対して謙虚で配慮することが必要であるように、謙虚でなければならない、注意深く耳を傾けなくてはなりません<sup>16)</sup>。

さらにアイダルは、教皇が提案する第三原理、「現実が理念に勝る」について、教皇が「現実」と呼んでいるのは、何より私の目の前に置かれている人のことであり、「目の前の人を聖なるものとして扱うということは、世界を救うための唯一の方法だと教皇は信じています」と述べている<sup>17)</sup>。

日本の森一弘司教は、教皇フランシスコのこの姿勢をイデオロギー的な活動と対比する。すなわち、人類大部分の貧しい人たちとごく少数の富める人たちとの格差を解消するために、社会構造を

変えていかなくてはならないとする社会主義的な立場を取る人たちのイデオロギー、運動との違いである。

フランシスコ教皇は、貧しい人の側に立とうとする。つまり人間に触れようとするわけです。明日の食べ物さえない庶民にとっては、イデオロギーは二の次であって、庶民の悲しみ、苦しみに触れてそこにイエス・キリストからの希望を与えようとする。それはフランシスコ教皇が司牧者として選んできた道にほかなりません。…今の教皇の考え方の基本には、「人間に対する共感能力を育てなさい」という考え方が根底にある<sup>18)</sup>。

教皇は、キリスト教信仰の中心が、抽象的な神概念ではなく、受肉した神、人間となってこの世に生きた神であることを折に触れて強調している。「貧しい人々の優先」も、狭義では事実上の貧しい人にかかわる共感、共苦であろうが、そのためには、普段の日常生活から感受性を養っていかねばならないだろう。身近に暮らす周囲の人々から始め、「民衆」である人々のつましくかつたくましい生活に目を開かれ、いわゆる「庶民感覚」に学ぶことである。

先述の小山は、アパルトヘイトの南アフリカで福音と直面したドミニコ会司祭アルバート・ノーランの言葉を引用した後、次のように述べている。

世界から必要とされずに、排除され、拒絶されている貧しい人々は、彼らの必要のうちに私たちに大きな贈り物、実際すべての中で一番大きな贈り物を与えてくれるのです。彼らは、私たちが心を開いて愛のうちに彼らを受け取るよう招きます。私たちが心を広げて彼らを受け取るならば、私たちはもっと愛に満ちた人間になり、したがってより十全に生きる人間になり、より神性に満ちたものになります。誰もそれより大きな贈り物を私たちに与えることはできません。貧しい人々は私たちに神の愛をもたらします。実際、救いは貧しい人々からだけ私たちのもとにやってくる。私たちが貧しい拒絶された人々に手を差し伸べるとき、世話と愛の贈り物を彼らに差し出します。しかし、彼らはより大きな贈り物、より神のようになるという贈り物を私たちに与えてくれるのです<sup>19)</sup>。

ここでも、「貧しい人々の優先」または「貧しい人々のための選択」というとき、貧しい人は、むしろ受けるよりも与える人であり、宣教者側に受ける謙虚さが要請されることになる。

## Ⅱ 「社会活動の霊性」における「貧しい人々の優先」——A. ノーランと本田哲郎

### 1 ドミニコ会士 A. ノーランの「貧しい人々の側に立つこと」

現代カトリック教会の動きの中で、ドミニコ会も、固有の宣教を活性化し聖ドミニコの創立計画を現代化するガイドラインを各総会で決定し、種々のレベルの共同体や会員の取り組みを続けてきた<sup>20)</sup>。「5つのフロンティア（境界線）」にまとめられてきたドミニコ会における福音宣教の課題のうち、第2「人間的なものと非人間的なもののフロンティア」の中で、南アフリカにおける「アパルトヘイト（人種隔離政策）」撤廃に、福音の真理の根本的な追究によって貢献したドミニコ会士 アルバート・ノーランがいることは、これまでも扱ってきた<sup>21)</sup>。先に小山も言及していたノーランである。

ノーランは、南アフリカで、そして世界全体で生きているイエス・キリストを現そうとする福音宣教の霊性を探究し、著作し、活動している。深い聖書理解に基づいて 1980 年代に各種の講演・研修会で発表された霊性、「霊的成長と貧しい人々の側に立つこと」は日本でも紹介され、「社会活動の霊性」とも呼ばれて実践されている<sup>22)</sup>。出発点は、貧しい人々の側に立つという意識的で明確な決断であり、貧しい人々と関わるいわゆる社会活動を通してキリスト者は段階的に成長するという霊性である<sup>23)</sup>。4つのステップについては、その概要をまとめて拙稿に述べた<sup>24)</sup>。ノーランはこの4つのステップの解説のあと、長い精神的な闘いと苦しみを耐える必要、絶えまない変化の過程に在ることを自覚する重要性、成長するための勇気、自分と先に行く人と後についてくる人への理解と評価の努力、皆で先へ進むための支え、それぞれに対する聖霊の働きかけへの信頼を挙げて締めくくっている<sup>25)</sup>。

貧しい人々の側に立つことと霊的成長に関するノーランの論説は、確かに解放の神学に関する編著の中にも収められ扱われたのだが、彼は独自の進展を示した。南アフリカのアパルトヘイトという現実の中での貧しい人々の優先、人種差別に苦しむ人々の側に立って神学を深め活動する道を選んだ。ノーランは、事実、選ばれた総長職を辞退し、欧米や中南米から「輸入」した神学でなく「南アフリカの神学」の発展をエキュメニカルに目指す「現代神学研究所」の活動に、創設から貢献し活動し続けているのである。これについては福音の「コンテクスチュアリゼーション」というテーマで述べたが<sup>26)</sup>、ノーラン自身がこの活動の中で福音化されていったことも間違いなからう。ノーランの「霊的成長と貧しい人々の側に立つこと」において、宣教者自身の回心と福音化が鍵になる。すなわち、宣教する立場にある者自身が立ち位置と価値観を転換すること、それによって自らが貧しい人々から宣教され福音化されるのを謙虚に認めることであり、ノーラン自身が体験をもって証したことである。

このノーランの霊性を日本において理解、実践している福音宣教者に、フランシスコ会司祭の本田哲郎（1942-）がいる。新共同訳聖書の翻訳に携わった聖書学者で、フランシスコ会日本管区長



を務めた時に体験した出来事を契機に、その後、大阪の「釜ヶ崎ふるさとの家」を拠点に日雇い労働者・ホームレス支援の社会的活動を続け、聖書と福音を再解釈、独自の翻訳聖書をはじめとする著作活動も続けている<sup>27)</sup>。その著書『釜ヶ崎と福音——神は貧しく小さくされた者と共に』に収められた論考は、ノーランの霊性に出会った本田が行った、日本の状況におけるいわばコンテクスチュアリゼーションといえる主張と実践をまとめたものである。

筆者は先に、第1のステップの「痛みの共感」が極めて重要視されていることに関して述べた<sup>28)</sup>。今回、「貧しい人々」と出会う宣教者自身の回心と福音化の観点から、ノーランの霊性を基に、本田の福音理解、信仰理解が、釜ヶ崎の実体験においてどう展開し深化したかに着目していく。

## 2 フランシスコ会士本田哲郎の「貧しく小さくされている人々の側に立つこと」

### (1) 本田哲郎の実体験

本田の著書『釜ヶ崎と福音——神は貧しく小さくされた者と共に』冒頭に掲げられ、旧版ではカバーにも用いられた画家フリッツ・アイヘンバーグの絵「炊き出しの列にならぶイエス」(1953年)と、その下に添えられた「小さくされた者の側に立つ神……！サービスする側にではなく、サービスを受けねばならない側に、主はおられる」とのコメントは、本田の問題意識を端的に表現している。神は助ける側の人に働いていると普通はイメージするが、「神さまはむしろ、手助けを必要とするまでに、小さくされてしまっている仲間や先輩たちと共に立っておられる」という洞察である<sup>29)</sup>。

「よい子症候群」だったと自己評価する本田は、ホームレスとのある出会いの体験から回心していく。「信仰を持ってるわたしが神さまの力を分けてあげるものだと思いこんでいた」が、「わたしには分けてあげる力なんか、なかった。ほんとうは、あの人を通して神さまがわたしを解放してくれた」と思うようになったのである。「痛みを知る貧しく小さくされた人というのは、こんなにも思いやりのある人だった」、「日雇い労働者に限らず、生きていく中でほんとうにつらい思いを日常的にしいられている人たちこそが、人を解放するパワーを持っている」、「人の痛み、苦しみ、さびしさ、悔しさ、怒り、それがわかる人だからこそ、人を励ますことができる」と気づき、「このことを真剣に受けとめて、尊敬の心をこめて関わらせてもらったときに…関わらせてもらうことによって、こちらにもその力を分けてもらえる」と考え、生き方が変えられる<sup>30)</sup>。

同時に、聖書学者の司祭である本田は、当然のように聖書を読みなおしている。旧約聖書において神が最も貧しく小さくされていたイスラエルの民を選んだことをはじめ、パウロのこぼを通して、「神は、いちばん貧しく小さくされている者を通して、すべての人を救う力を発揮される」、「神の力は、貧しく小さくされている仲間たちを通してはたらく」と、福音の価値観は逆であることに納得する。「むしろクリスチャンであるわたしたちこそ、もっと人の痛みに敏感になって、人間らしい人間になるために、この仲間たちから教えてもらわなければいけなかったんだ」と本田は気づく<sup>31)</sup>。

また、新約聖書のキリスト賛歌（フィリピ 2・6-8）を、神は「下からすべてを支え上げる方」であり、「低みからはたらいておられる天の父を、見える形に、すなわちことば化して示してくださったのがイエスの生きざまなのだ」<sup>32)</sup>と読み解く。イエスは、いわゆる「へりくだり」ではなく、とことん低みから働いている神の啓示である。だから、痛みの共感、「コンパッション」は大事だが、必要なのは、「相手の立場には金輪際立てないというところから発想しなおす」こと、「相手を正しく理解しようと思ったら、…相手よりも下に立つこと…教えてくださってという学ぶ姿勢を持つこと」であるとする<sup>33)</sup>。これについて、本田は体験から学んだ実感を語っている。

いまのわたしは、釜の労働者から受け入れてもらっていますが、それはわたしが本気で相手の話に耳を傾ける気になったときからです。労働者のいうことは一見、論点がずれたり、とっぴょうしもないと思えることがあります。でも実はその中に、学者や知識人がいうことよりもはるかに鋭いものがあるということに少しずつ少しずつ気づいてきて、本気で聞くようになったのです。これどう思うって教えてもらったりする。そういうことができるようになって、つまりかっこよくいえば、相手を尊敬できるようになって、はじめて相手から受け入れてもらえるようになった、そういうことなのです<sup>34)</sup>。

本田自身は実際に釜ヶ崎で生活することを決断したのだが、肝要なこととして強調するのは、自分が無理に貧しい人々の仲間入りしようとするのではない——「忘れてならないのは、かつてに相手の立場に立ったつもりで考えをめぐらし、それを押しつけないことです。相手の立場には立てないのです。相手よりも下に立つしかない。相手よりも下に立つとは、『教えてください』という関わりの姿勢にほかなりません」<sup>35)</sup>。宣教者にまず求められるのは、聖書に基づくイエスの生き方の探求、徹底した傾聴の姿勢と真の謙虚さ、心からの相手への尊敬、根底からの自己回心、自己福音化である。そうしてはじめて、貧しい人々の思いを心から尊重し、その真の望みに懸命に耳を傾け、謙虚に教えてもらいながら連帯し、その願いの実現に本気で協力することができるようになるということである。

## (2) 本田哲郎の「社会活動の霊性」

本田は、著書『釜ヶ崎と福音——神は貧しく小さくされた者と共に』の中で、直接ノーランの「霊性」について扱い、第Ⅲ部「いま、信頼してあゆみ始めるために」の第二章として収めている。この章「社会活動の霊性」の中で、まず、「貧しい人々の優先」、「貧しい人々のための選択」の定義が、「貧しく小さくされている人々の側に立つ」こととして表現されている。

抑圧され、貧しく小さくされている人々の側に立つとは、同じように貧しくなるということ

はなく、貧しくされている彼ら自身の、願いと、判断と行動の選択に信頼して、その実現のために連帯して協力することです。それぞれが自分の社会的な場を活かして、職場や家庭、持っている技術や能力や人脈を使って、彼らの思いに連帯しつつ協力を惜しまないことです。自分が持っているものを捨てるのではなく、持っているものを有効に活用して、彼らの願いの実現に協力することです<sup>36)</sup>。

本田がノーランの「社会活動の霊性」を体験的に理解して学んだ「貧しい人々の優先」の根拠や内容については、特に第3と第4のステップの解説に盛り込まれている。第3のステップで、「正義に反する社会構造、弱い立場の人たちを抑圧してしまう社会の仕組みのいちばんの被害者である、貧しく小さくされた人たちには、わたしたちにはない洞察力があり、わたしたちにはない知恵がある」<sup>37)</sup>と貧しい人々の真価を見出す。霊的尊厳についても、「神は世の貧しく小さくされた人たちをお使いになる…貧しく小さくされている人たちの苦しみと痛みの中に受難のキリストの姿を見るだけでなく、彼らの訴え、要求の奥に神の声を聞き、彼らがふみ出す一步とその方向の選択に、神の手とその力を知るようになるはずです」<sup>38)</sup>と評価する。

ノーランの「社会活動の霊性」第4のステップでは、貧しく小さくされている人たちを美化し英雄視する過ちから抜け出して真の連帯に至る道に進む。ここでも、「貧しい人々の優先」によって学ぶことの根拠と内容に関して、「[貧しい人々は、]抑圧され貧しくされるとはどういうことかを、だれよりも知っているからであり、そこから解放されるために、まず何をどうすべきかを、自分のこととしてわかっているから…わたしたちが彼らから学ぶのは、その価値観、その感性なのです」と述べている<sup>39)</sup>。ここでいう価値観、感性に関して、本田は別の章で「極限状況の視座に立つ価値観」とも表現し、社会で弱い立場に生き人の痛みがわかる貧しい人々が、建前、きれいごとにごまかされない真実の価値観を持ち、その感性は人々の欺隔をあばくことができるのだと見る<sup>40)</sup>。

4つのステップの到達点となる真の連帯について、本田は、「連帯して闘うとは、わたしたちのピントのぼけた解放理論を押し付けることではなく、彼ら自身の感性が選ぶ優先順位と闘いの方法を謙虚に認めて、そこに参加するということ」<sup>41)</sup>と表現し、4つのステップの体験を重ねることによって霊性を深めつつ自らも解放され、貧しい人々との関わりから同じ聖霊に導かれていることを認め合うことができると説いている<sup>42)</sup>。

本田の新版には、原稿執筆2014年時点の国内外の社会情勢に応じた加筆がなされ、特に、2011年東日本大震災を反映し、2013年就任の新教皇フランシスコの言葉も付したあとがきで締めくくっている。特に今の日本で「貧しい人々の優先」とは何かの理解を助けられる箇所として、やや長いが下に一部引用する。

人を人として大切に。ここに立ち返るところからやり直すしかありません。現実的なとっ

かかりは、今いちばん大切にされていない人（人々）の側に視座を移すことです。その人たちの側から、起きている事態をしっかりと見直すのです。人が人として大切にされないとは、安心して働き、生活できる場所と住まいと仕事がない状態、すなわち貧困、飢餓、差別、抑圧、尊厳と生命の軽視にさらされていることです。視座を移すとは、こういう人たちに目を向けるとか関心を向けるというレベルのことではありません。…仕事を奪われ、家を壊され、生活と命を奪われていく人たちを、自分の仲間、身内として「連帯」する視座が求められています。この視座に立ってこそ、何をなすべきかが見えてくるものです<sup>43)</sup>。

ノーランから本田へと伝わった「社会活動の霊性」と「貧しい人々の優先」には、同じ人間同士で向き合い、連帯して共通善を求めるという一貫した方向性が見られる。その際、いわば社会的に有利な立場にある者には真の謙虚さが求められ、不利な立場に置かれている者には卑屈を感じない真の自己尊厳が求められ、双方に偏見や先入観なく虚心坦懐に向き合う姿勢が必要であろう。ノーランの直面したような状況、本田のような体験的实践は、ある意味では特別な例かもしれない。何事も実践は容易ではない。個人的実践も共同体的実践も、各自置かれている状況、所属する団体、小教区、地域、職域等、種々の事情はまちまち、しかし、具体的な実践のあり方には様々な可能性があろう。だからこそ、ノーランが一足飛びに唱えていない「4つのステップ」を意識し、身近な一歩からでも始めたいものである。

### Ⅲ マドリッド「聖マルチンの家」における「貧しい人の優先」

聖ドミニコの生まれた国スペインの首都マドリッドにある、ドミニコ会スペイン管区（2016年より「イスパニア管区」として管区編成）によるホームレス支援の民間非営利使徒事業の施設「聖マルチンの家」（FUNDACIÓN “SAN MARTÍN DE PORRES”）については、筆者がこれまで2回訪問した体験と、その後創立50周年を記念してまとめられた資料等をもとに紹介し報告した<sup>44)</sup>。前稿では、福祉の専門家ではないドミニコ会員としての視点から、特にそこに生きるドミニコ会士の生き様、すなわち、当時の修道院長ラミロ・カステーリョ<sup>45)</sup>、教会主任司祭アンドレス・ゴンサレス<sup>46)</sup>、施設長の助祭アントニオ・ロドリゲス<sup>47)</sup>、それぞれが観想に裏付けられた活動を生きていること、信仰や召命についての生きた証しから、福音の捉え方、生き方を学ぼうと試みた。体験の中で印象深かったことの一つに、クリスマスを祝う教会の夜半のミサにおける説教があった。ミサの司式司祭アンドレス・ゴンサレスは、クリスマスの核心を表すかのように、「神さまが人間になった」という聖書のことばを特に強調して繰り返したのである。

また、「聖マルチンの家」の沿革の中で注目すべきは、2002年から2003年、ドミニコ会スペイ

ン管区会議において、修練期前の養成の家に指定されたことである。入会を志願する若者と最初に触れ合う場としたということは、福音的ドミニコ会的養成と使徒職の場として、この共同体が高く評価されていることの確証である。実際、ここで一時期を過ごした若者たちは皆、来て、聴いて、観て、奉仕して、人生の代えがたい体験だったという。そして、「貧しい人々が、私たちが福音化した」というのである<sup>48)</sup>。本稿のテーマについては、創立 50 周年記念誌中に、上記ラミロ、アンドレス、アントニオの連名で展開した論述、まさに「貧しい人々の優先—福音は決定的であり、貧しい人の優先を明らかで弁解の余地なく要求する」と題する一つの章があり、「貧しい人々の真の社会統合」、「神は世の貧しい人々のうちに姿を現される」、「説教し、麦を与える」の 3 節から成る。記念誌でラミロ、アンドレスそれぞれのプロフィールを読むと、解放の神学からインスピレーションを受けたこと、ノーランの著作が愛読書に入っていることが共通しており、マドリッド「聖マルチンの家」において「貧しい人々の優先」の霊性を生きていることがまとめられている。以下、各節で特に注目すべき箇所について、私訳で引用、言及していく。

第 1 節「貧しい人々の真の社会統合」は、おそらく「社会活動の霊性」第 4 のステップが重なり、「最も貧しい人々とともに生きることは、理想化され飾り立てられた幻想を避け、貧しさに生きることを要求します」と、真の連帯を主張している。

貧しい人々を選択することは、私たちにとって、社会での固定観念を退けることです。私たちの社会では、所有が優先され、関心事はますます財産の意味によってあらわされ、そこでは代替価値を持たないものはすべて軽んじられるという社会に出会います。逆に、貧しさは、貧しさが決して自由に選んだ生活スタイルではなく強いられた状況であるこの世の極めて貧しい人々と一緒に日々生きる連帯へと、私たちを後押しする強さとして経験するものです<sup>49)</sup>。

第 2 節「神は世の貧しい人々のうちに姿を現される」は、これまで見てきた貧しい人々の人間的、霊的尊厳にかかわる項目である。

神は世の貧しい人々のうちに姿を現されるのです。私たちの生活が意味を持つのは、まさにそこです。そうしてのみ、イエス・キリストの真の教会の「信憑性」が示されるのです。…この最も貧しい人々に寄り添うには、社会疎外と不正の原因を追及しながら、苦しむ人々の痛みに注意深く優しくあることが必要です。…私たちは貧しさの現実の状況を知っているので、抑圧されている人々を解放する大きな知らせを説教することができるのです<sup>50)</sup>。

貧しい人々にいかに傾聴し、いかに向き合い、いかに苦しむキリストを見出すか。このドミニコ会士たちが実際にアルベルゲ（この場合、福祉的ないわゆる簡易宿泊所）でいわば「格闘」してい

る姿は、筆者の脳裏に焼き付いている。

第3節「説教し、麦を与える」には、これまで考察してきた「貧しい人々の優先」の要点が凝縮されている。貧しい人々の人間的、人格的尊厳を重んじ、現実の物質的、霊的必要に応えること、そして、宣教者の絶え間ない回心が表現されており、やや長いが、重要な証言として引用する。

アルベルゲが日々受け容れている人々に向けて展開することのできる根本的な仕事は、人格としての尊厳を与えること、つまり、「毎日の糧、食事、衣服、滞在して休む場所、医療などを提供しながら、疎外された人、貧しい人、取るに足りない人、抑圧された人、搾取された人を解放すること」であるという十分な確信があります。同時に、私たちにとっては、人格としての尊厳と利用者の中で交わされる相互の連帯の意識が毎日毎日成長しているのを確認できるのが、希望の深い源となっています。最も貧しい人々の間に実際に居ることは、また、彼らに近づく人にとってひとつの回心を要求することも明らかです。この意味で、共同体は絶えず問われ、回心し続けるよう感じています。私たち自身からの解放、私たちが囚われ、み国に達するのを阻むものからの解放。私たちにとって、「聖マルチンの家」は、回心、「主の恵みの年」が到来する一つのかたちへの絶え間ない呼びかけなのです<sup>51)</sup>。

結果として、ここでは人間味ある交流による希望や宣教者側の霊的解放という「癒し」、神の国の小さな実現も体験しつつあるのがわかる。

「聖マルチンの家」50周年記念イベントの際、当時のスペイン管区長フランシスコ・ハビエル・カルバリョは、そのメッセージを「貧しい人々は私たちと私たちの社会を福音化し、人間らしくするということを教えてくれた3人の兄弟に感謝します」という言葉で締めくくっている<sup>52)</sup>。「聖マルチンの家」のドミニコ会士たちの実践にも、貧しい人々との真の連帯、貧しい人々のうちに神の姿や呼びかけを見出すこと、人間として相互に尊敬し触れ合うこと、傾聴し、謙虚に学び、観想し、自ら回心し福音化されることといった宣教者のあり方が見られた。このドミニコ会士たちも、最も貧しい人々、疎外された人々への奉仕に生涯を捧げて「いつくしみの特別聖年」2016年9月4日に列聖されたマザー・テレサ（1910年旧ユーゴスラビア・スコピエ～1997年インド・コルカタ）も、貧しく見捨てられた人々のうちに神の姿を見出し、苦しむキリストの体としてその人々に触れ、人間の尊厳を回復しようとする生き方である。苦しむ人々に神の顔を見、キリストの顔を見る信仰は、双方を、あるいはむしろ宣教者側をより福音化するともいえよう。

アフリカで、日本で、スペインで、世界各地で「貧しい人々の優先」の探求が続く。そのためには、真の回心と謙虚さが求められている。

## おわりに

ドミニコ会士宮本久雄が、「善いサマリア人」のたとえとして有名な福音書の箇所(ルカ 10.25-37)について展開した考察は、本テーマに示唆を与えてくれる。「サマリア人が死にかけてユダヤ人を憐れみ、迎接した点」ばかりでなく、「逆に、半死半生のユダヤ人の立場になって考えてみよう」という視点である<sup>53)</sup>。すると、異邦のサマリア人が傷ついたユダヤ人の隣人になるとともに、ユダヤ人がただの人としてサマリア人の隣人になる、という双方向による「隣人」の深い意味が見出されるのである<sup>54)</sup>。ここでイエスは、ユダヤ人を助けたサマリア人としても、また半死半生のユダヤ人としても描かれ<sup>55)</sup>、通常見落とされがちな第二の「イエス＝ユダヤ人」の視点に転換するという発想は、アイヘンバーグ「炊き出しの列にならぶイエス」の場合と同様、「貧しい人々の優先」を考える際に示唆を与えられる。

また、最初に挙げた聖ドミニコが修道会を創立後、修道士とパリへ旅行中、ドイツ人の巡礼者グループに出会ったときのエピソードがある。

彼はドイツ語が理解できず、彼らに説教することができないことに失望していた。彼はパートランドに言った。「あの人たちと福音を分かち合うために、彼らが言っていることが理解できるように祈りましょう」。ここで興味深いのは、ドミニコが祈ったのは、ドイツ人たちの方が彼の言うことを理解してくれるようにではなく、逆に、彼のほうから彼らを理解できるように祈ったことである。私たちに必要なことは、信仰を語る他の言葉を学ぶこと、即ち、私たちの語彙を広げることである<sup>56)</sup>。

聖ドミニコは、同時代を生き出会ったこともあるとされるアシジの聖フランシスコとも同様に、「理解されることよりも理解することを」求めて祈った。「貧しい人々の優先」に見られる、宣教活動の相手から学ぶ謙虚さを備えた人でもある。福音的召命を受け、確かに福音化の使命を担っている宣教者は、福音を「伝えよう」と気が逸り、無意識であったとしても与える立場を取り、悪くすると福音とは程遠い特権意識や自己満足にとらわれる危険もはらんでいる。本田は、ホームレスを通して神からの呼びかけを受けとめ、生き方を変えられ、解放され、癒された。「貧しい人々の優先」は、宣教者の陥りがちな危険や過ちから救い、癒し、福音化するともいえよう。宣教者にとって、貧しい人々、自分と異なった立場、境遇にある人々から与えられること、日頃接する人々から学ぶことは多くある。要は、福音化されることに心を開くかどうか、絶え間ない回心にかかっている。回心は、もちろん神の恩恵なしにありえないし、人には、聖霊の働きを受けとめ、身を委ねる信仰、感受性、柔軟性、霊的なエネルギーや心の広さが必要である。

## 注

- 1) DISCURSO DEL SANTO PADRE FRANCISCO A LOS PARTICIPANTES EN EL CAPÍTULO GENERAL DE LA ORDEN DE LOS FRAILES PREDICADORES (DOMINICOS) Sala Clementina, Jueves 4 de agosto de 2016,  
<http://www.news.va/es/news/a-los-participantes-en-el-capitulo-general-de-la-2>. (参照 2016-8-5)
- 2) マリ・ドミニック・ポアンスネ 岳野慶作訳『聖ドミニコ』サンパウロ (アルバ文庫)、1999年、19-20頁。
- 3) 拙稿、宮武信枝「人権擁護の先駆者ドミニコ会士ラス・カサス—その生涯の現代的意義」『聖カタリナ大学キリスト教研究所紀要』第12号、2009年、1-24頁、および、「ドミニコ会の福音宣教と教育—ラス・カサスの平和的福音化からの一考察—」『聖カタリナ大学研究紀要』第26号、2014年、1-26頁参照。
- 4) 宮本久雄『聖書と愛智—ケノーシス（無化）をめぐって—』新世社、1991年、46-48頁参照。
- 5) 小山英之『教会の社会教説—貧しい人々のための優先的選択』教文館、2013年。
- 6) 教皇フランシスコ使徒的勸告（日本カトリック新福音化委員会訳・監修）『福音の喜び（2013年11月24日）』カトリック中央協議会、2014年。
- 7) 教皇フランシスコ回勅（瀬本正之・吉川まみ訳）『ラウダート・シ—ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』カトリック中央協議会、2016年、「第四章 IV 共通善の原理」より第158項。
- 8) 教皇フランシスコ使徒的書簡『あわれみあるかたと、あわれな女』カトリック中央協議会、2017年。
- 9) 『カトリック新聞』2017年6月25日号、参照。  
(ア) また、以下引用の公式日本語訳は、カトリック中央協議会ホームページ、2017年 第1回「貧しい人のための世界祈願日」教皇メッセージ、<https://www.cbcj.catholic.jp/2017/11/17/14909/>を参照。
- 10) <http://www.cathoshin.com/news/jubilee-161111/11273>、および <http://ja.radiovaticana.va/news/2016/11/11/いつくしみの聖年：教皇とホームレスの人々との出会い/1271697>（参照 2016-11-16）
- 11) <http://ja.radiovaticana.va/news/2016/11/14/いつくしみの聖年：社会的に疎外された人々のためのミサ/1272251>（参照 2016-11-26）
- 12) 『カトリック新聞』2017年12月3日号、参照。
- 13) ホアン・アイダル「教皇フランシスコの神学」、片山はるひ・高山貞美編『福音の喜び 人々の中へ、人々と共に』日本キリスト教団出版局、2016年、11頁参照。
- 14) 同上、14-5頁。
- 15) 同上、19頁参照。
- 16) 同上、27頁。
- 17) 同上、33頁。
- 18) 佐々木宏人「封印された殉教」終章「消えた憲兵」の闇。そして「ある司教との対話」、『福音と社会』Vol. 293、カトリック社会問題研究所、2017年8月、P.55、森一弘司教との一問一答。
- 19) 同上、176-7頁。
- 20) 拙稿、宮武信枝「現代ドミニコ会の巡歴」『聖カタリナ大学キリスト教研究所紀要』第11号、2008年、



21-23 頁参照。

- 21) 拙稿、宮武信枝「社会における福音の『コンテクスチュアリゼーション』——現代ドミニコ会士アルバート・ノーランの霊性」『聖カタリナ大学研究紀要』第 25 号、2013 年。
- 22) Albert Nolan, *The Service of the Poor and Spiritual growth*, London: CIIR Justice Papers No.6, 1985. 邦訳で参照できるのは、アルベルト・ノーラン『P と精神的な成長』、ホセ・マリア・ビジル編（ステファニ・レナト訳）『二十一世紀を変革する人々——解放の神学が訴えるもの』新世社、1997 年、135-146 頁所収。なお、この編者は、最初に、「貧しい人々の側に立つこと」(OPTION FOR THE POOR) を意識的に決定することを P と記すことにしている。また、ノーランのこのテキストは、たとえば貧困飢餓対策に取り組むスペインの NGO である Manos Unidas で、参考資料として配布、購読が勧められている (Albert Nolan o.p., *Crecimiento Espiritual y Opción por los Pobres*, Cuadernos de Lectura, Nº 3, 1997)。
- 23) 「貧しい人々に対する私たちの関わり姿勢は、時の経過とともに成長できる。…これはキリスト者にとっては霊的な成長である。祈る場所があれば、貧しい人々に対する愛の成長をうながす場所がある。…貧しい人々との関係にも段階がある。嬉しく思うときがあれば、進むべき道が見えなくなるときがある」(ノーラン『P と精神的な成長』、135 頁)。
- 24) 第一のステップは、「痛みの共感と助け」。苦しい体験を見聞きして心が動き、その気持ちが成長、発展するには、実際に体験し、少なくとも情報によってよく知ることが必要で、無関心と逃げがその妨げになる。「痛みを感じる人は、神の働きに参加し、神が世界に対して抱いている気持ちを分かち合っているのである。信仰は、貧しい人々に出会うとき、キリストの顔を発見させる」。この痛みの共感、自分の暮らしの簡素化や支援活動といった行動へ駆り立てる。

第二のステップは、「構造を発見し、怒りを感じる」こと、貧しさは社会構造によるものだと発見し、痛みの共感から呼び起される怒りである。「怒りは、共感の深さを示すものである。神の怒りの強さが、貧しい人々が神にとって、どれだけ大切かを示しているように。抑圧者に対して神が感じている怒りを共に感じなければ、私の痛みの共感成長しない。抑圧者に対する神の怒りは、人間として金持ちを愛していないことを意味しているだけではない。怒りは真剣な愛の現れである。」

第三のステップは、「貧しい人々の力を発見する」、奉仕するという時の謙虚さ。貧しい人々自身の力に気づき、その洞察力と知恵に逆に教えられるという発想の転換である。「神学的に云うと、神はこの世を救うために私たちではなく、貧しい人々、抑圧された人々を選んだのであり、…これを発見すると、貧しい人々の闘いの中に、神の力を見ることが出来るようになる。貧しい人々の苦しみの中に、キリストの苦しみを見ることが出来るだけでなく、彼らの政治的な闘いの中で神の声を聞き、神の力、神の手を見ることが出来るのである」。ただし、貧しい人々を理想化、英雄化しようとする気持ちは乗り越えなければならない。

第四のステップは、「英雄扱いから具体的な連帯へ」。貧しい人々に対する幻滅と期待はずれに直面し、理想主義から現実に基づく真の連帯に移り、共に抑圧と不正な構造に対して闘うことである。「本物の連帯は、互いの違いを認め合うときから始まる。抑圧に対して共に闘うとき、それぞれ違った役割がある。連帯をより基本的な闘いに向け…、そのためには貧しい人々同志の連帯につながりをもつことである。…キリスト者はキリストと連帯することによって神の正義と連帯し、具体的には貧しい人々と連帯する

ことになる。」(前掲拙稿「社会における福音の『コンテクスチュアリゼーション』」、10-11 頁参照。)

- 25) ノーラン、前掲『P と精神的な成長』、146 頁参照。
- 26) 注 24、拙稿参照。
- 27) 本田哲郎は、1971 年に司祭叙階。「釜ヶ崎ふるさとの家」共同代表、釜ヶ崎反失業連絡会共同代表などを歴任。著書に、『イザヤ書を読む』筑摩書房、1990 年、『小さくされた者の側に立つ神』新世社、1990 年、『釜ヶ崎と福音——神は貧しく小さくされた者と共に』岩波書店、2006 年(岩波現代文庫版、2015 年) などがある。
- 28) 本田、前掲『釜ヶ崎と福音』、206-246 頁に、ノーランの講演録“A Spirituality for Social Activists”(1988) のアウトラインを下敷きに、釜ヶ崎での本田自身の体験による福音理解、信仰理解をまとめたものとして、「社会活動の霊性(スピリチュアリティ)」。
- 29) 本田、同上、注 8 頁参照、フリッツ・アイヘンバーグ「炊き出しの列にならぶイエス」(1953 年)。
- 30) 同上、30-36 頁より抜粋。
- 31) 同上、35-42 頁より抜粋。
- 32) 同上、159 頁。77
- 33) 同上、58 頁。
- 34) 同上、59 頁。
- 35) 同上、78 頁。
- 36) 同上、206-207 頁。
- 37) 同上、235 頁。
- 38) 同上、238 頁。
- 39) 同上、242 頁。
- 40) 同上、258-259 頁。
- 41) 同上、243 頁。
- 42) 同上、245 頁。
- 43) 同上、264-265 頁。
- 44) 拙稿、宮武信枝「マドリッドの『聖マルチンの家』——スペインにおけるドミニコ会と福祉」『聖カタリナ大学キリスト教研究所紀要』第 19 号、2016 年、45-63 頁参照。<http://www.fundacionsmp.org/> (参照 2016-5-7) この中に、創立 50 周年記念誌もある。Fundación San Martín de Porres, *EN CONFIANZA 50 AÑOS FUNDACIÓN SAN MARTÍN DE PORRES*, 2013, España. 本文中の文章は私訳である。
- 45) 前掲 *EN CONFIANZA 50 AÑOS FUNDACIÓN SAN MARTÍN DE PORRES*、pp. 302-306、2012 年 12 月 4 日に開催された記念イベントでのコメント、pp. 18-19 参照。
- 46) 同上、pp. 284-287、記念イベントでのコメント、pp. 20-21 参照。
- 47) 同上、記念イベントでのコメントおよび報告、pp. 22-26 参照。
- 48) 同上、pp. 294-295 (“LOS POBRES NOS HAN EVANGELIZADO” 2002 y 2003) 参照。
- 49) 同上、pp. 289-293 OPCIÓN POR LOS POBRES より、Inserción real en el mundo de los pobres, pp. 290-291。
- 50) 同上、Dios se revela entre los desheredados de la tierra, pp. 291-292。

- 51) 同上、Predicar y dar trigo, pp. 292-293。
- 52) 同上、記念イベントでのコメント、pp. 28-30。
- 53) 宮本久雄『福音書の言語宇宙』岩波書店、1999年、105頁参照。
- 54) 同上、108頁。
- 55) 同上、114頁。
- 56) ティモシイ・ラドクリフ 岩城聰・伊達民和監修 芦屋聖マルコ教会翻訳の会訳『なぜ教会に行くの——パンとぶどう酒のドラマ』聖公会出版、2013年、110-111頁。

# "OPCIÓN POR LOS POBRES" EN LA ORDEN DOMINICANA

Nobue MIYATAKE

## Abstract

El año 2016 la Orden Dominicana celebró el jubileo del 800 aniversario de su fundación. “La opción por los pobres” ha sido una actividad prioritaria a lo largo de su historia. Dentro de esa actividad destaca la experiencia vital en Palencia del joven Domingo, fundador de la Orden, y también del dominico Padre Las Casas, a partir de su conversión en contacto con los indios de américa en la Española. La “opción por los pobres”, lleva consigo estar a su lado, tener compasión de ellos y hacerse conciencia de su dignidad humana. El mismo misionero debe aprender de los pobres y dejarse evangelizar por ellos.

En este estudio he reflexionado, en primer lugar, sobre la espiritualidad y la actividad de la Iglesia Católica hacia los pobres, sobre todo, según el pensamiento del Santo Padre Francisco, expuesto principalmente en la exhortación apostólica “Evangelii gaudium” y el Mensaje de la primera “Jornada mundial de los pobres” celebrada en 2017, que constituye un desafío al compromiso evangélico.

En segundo lugar, trato sobre la “espiritualidad de la actividad social”, que viene desarrollando en Sudáfrica el dominico Albert Nolan y de la experiencia personal del franciscano japonés Tetsuro Honda en Kamagasaki (Osaka). Honda afirma que las cuatro etapas de la “espiritualidad de la actividad social” de Nolan, y su propia conversión a través de su experiencia vital en Kamagasaki, le confirman que los misioneros también son evangelizados por los pobres.

A continuación, presento un modelo del apostolado de la Orden Dominicana a través de la “Fundación San Martín de Porres” de Madrid. Esa actividad que da acogida a las personas sin hogar, nos enseña que los pobres pueden evangelizar y humanizar a nuestra sociedad.

Finalmente, pienso que los misioneros deben escuchar, meditar y aprender con humildad de los pobres, convertirse y dejarse evangelizar por ellos.